

私の夢と学会への期待

藤岡 謙二郎

「歴史地理学会会報」第一〇〇号が出ることになった。創立以来の会員の一人として心から慶びたいと思う。その間私はわずかに二年間会長の任には当ったが、何等のお役にもたたず恥しく思う。しかし、その折にも申しあげたように、私には夢があり、今後ともその努力を薩乍ら怠らないつもりである。

戦後に誕生したわが歴史地理学会は、やつといま創立二〇周年を迎え、年報たる『歴史地理学紀要』も二〇冊をかぞえることになった。その着実な実証的研究は日本の地理学界はもとより、外国のそれにも大きな影響を及ぼしたことは疑えない。会員矢嶋仁吉博士はこの創立二〇周年記念特集号「再び歴史地理学の本質と方法」の序文によせて「学会発表以来二〇年の足跡を顧みると、斯学の基礎理論や方法論には不断の進歩があり、各個研究もその視野が拡大され、全国各地にわたって精緻な実証的研究が進められている。ここにおいて学会創立二〇周年を記念するとともに、将来の歴史地理学の礎石となることを期して本巻を上梓した次第である。」と述べている。IGCのワーキンググループには歴史地理学の部門も開かれ、戦後の日本において地理学による歴史地理学的な活動が盛んになったことをおもわず。しかしながら顧つてこの歴史地理学会の

将来を想う時、日本にあつては現在なお、地理学科のある大学に、自然地理学や人文地理学、地域地理学と並ぶ歴史地理学の講座がなく、わずかに筑波大学において、その歴史・人類学系の中に歴史地理学の講座がおかれたにすぎないことを思う時、学会においてはまず、今後こういつた大学の地理教育における歴史地理学の位置の向上をめざす実践的な方向にも眼を向けるべきだと、私は今も変らず念願している。それはあたかも日本地理学会において、大学における地理学の実験学科化運動が効を奏したのと同じように将来は、この歴史地理学会が主となって、その具体的運動をつづけるべきだと考えるのである。そこでここに具体的運動となると、現在の大学設置基準の中に、自然、人文両地理学がふくまれる系統地理学及び地域地理学と並んで歴史地理学をもう一つ加えることである。この枠組がある以上じつは今迄多くの大学の地理学科でも、仮令歴史地理学を専門としたい学生があつても、右の両系列の学科の一部として授業をうけ、単位を獲得することが出来なくなつていたからである。これは当局者や日本の地理学者の多くが、歴史地理学をもつて、なお、地理学ことに人文地理学や地域研究の単なる研究法だと考えている証拠である。しかし乍ら今日では歴史地理学は歴史の各時代ごとのクロスセクションに関する地域地理学であり、地域の変遷史的研究法を使用する現代の地理学でもあることは、外国では勿論、日本でも次第に明らかにされつゝある現状であるとすれば、学会としては、今後歴史地理学の地理学内部における位置づけの確立にも今後努力すべきであろう。

第二に現状右の如くであるとしても、戦後歴史地理部門を専攻す

る学生や研究者の数が多くなってきた今日、これらの人々の就職先が、従来のように単なる地理教員としてだけでなく、現在、歴史家や考古学者、さらに建築、土木、造園等の出身者が従事している役所の文化観光課や文化財保存課、その他博物館等で、新たに歴史地理学技師としての採用を考えるべきであろう。このためには公務員採用の場合、測量士や地理職、学芸員の中にも歴史地理学なる科目を組入れることを記すべきであろう。「歴史的風土」の保存と開発の両方が問題とされている昨今、「風土記の丘」と称する歴史的地域の整備計画が全国的になされている。ある府県の文化財審議委員を仰せ付かっている私は過月も、この案を強調した。それは「歴史的風土」の中には、古代の海岸線や古河に著名な河川流路の復原、歴史時代の生物環境の復原、条里地割や古道、さては廢城の城下町プラン等、考古技師や歴史家のみでは評価出来ない歴史的景観がふくまれているからである。またそしてこそ歴史地理学徒が現在の地域住民の声にも強くふれうると考えたからである。

第三に考えている私個人の夢は日本地理学会のあり方と関連した歴史地理学会のあり方のことである。現状を以てすれば、日本地理学会が戦前のように地理学での唯一の総合的学会でなくなつて来たことである。げんに、その本来の主流たりし自然地理学の部門以外の発表が相対的にすくなくなつて来たことである。それは多くの分散する学会に出席参加することの経済的負担の大なることにもかゝりがある。歴史地理学部門では昨今その研究発表者がすくなくなつて来たことからすると、日本地理学会は今後は地理学の総合的な連絡機関としてのみ、国際地理学会等において、日本を代表する学

会の役割を果すべきではなからうか。さらにこの場合もう一步入りこんで私個人の具体的意見を述べるのが許されるならば、現在の人文地理学会以下の全国的な学会は、この際日本地理学会に合併し、いわば日本地理学会、人文地理部会なる形をとることであり、歴史地理学会や経済地理学会、その他現存の地理学関係の諸学会においても同様である。そうして新たに自然地理部会が、従来の日本地理学会を母胎にして、新誕生或はふるい日本地理学会や地学協会等の再生として考へべきであろう。この場合、特定の大学の卒業生を中心とした地理学の研究団体は別に取扱うべきであろう。私が憶面もなく何故このような、他の学会の將來のことまでに口ばしを入れたかとなると、それは私が関係しているもう一つの学会たる日本都市学会と、各支部学会の例を知っているからである。この会において例えば、近畿都市学会は日本都市学会の支部的な性格をもち乍ら、なお且つ関東都市学会とは異なつた地域的性格をも兼ね備え、従来では年に一度、各(部)会―各部会では夫々独自の研究発表を行つている―から、会員が集つて日本都市学会員として研究発表をするのである。つまり日本都市学会員たるものは、少くも一つ以上の支部会員でなければならぬことである。しかし、この会での悩みは会員夫々に、建築、土木行政、地理、その他に自分の専攻学会をもつことにある。

またこの日本都市学会と、私が仮想する將來の日本地理学会とが異なる点は、一つはその支部が地域ブロック別、これに対して地理学会での私の夢は内容的分類たることである。

以上何事も理論を主張する場合、具体案をあげないと気がすまな

私の性格からいわば、平地に波乱を捲きおこし易いから、右の案を仮りに出したわけであり、関連する現在学会への非礼はお許し願ひ、あくまで私個人が平素いだいて来た夢として参考にしていただけたら幸いである。

およそ学会の運営もまた、人生の歴史と同じように前途に多難の途が横たわっている。一〇〇号記念に際して既往の学会のあゆみをふりかえるのみであつてはならない。今後の運営にもまた会員全体の夢を討議し合つてほしいと思う。

〔付記〕日本における戦後の歴史地理学の発展とこの歴史地理学会の役割については、今春京大退官記念の拙著『回想と自己批判』中にも述べた。本学会設立の産婆役になられた故内田寛一先生が京都で開催された人文地理学会に参加せられ、その折に承つた大学における歴史地理学の冷遇のお話を想い出し、山崎委員長から何か書けとの御催促に断わり切れず、思い切つて、あらでもがなのアピールの一文になつてしまった。大方の御寛容を乞う次第である。

(昭和四九一五〇年度会長 奈良大学文学部教授・京都大学
名誉教授)